

世代間不均衡下の都市倫理

代表 吉良 貴之（宇都宮共和大学シティライフ学部専任講師、法哲学）

分担 蝶名林 亮（創価大学文学部専任講師、倫理学）

協力 高木 智史（一橋大学大学院、法哲学）

協力 酒井 光一（元オックスフォード大学大学院、考古学）

協力 真殿 琴子（京都大学大学院、イスラーム思想史研究）

協力 南部 健人（北京大学大学院、近代中国文学）

協力 高橋 慧（元ミネソタ大学博士研究員、物理学）

〔研究報告要旨〕

本研究課題「世代間不均衡下の都市倫理」は、少子高齢化が急速に進む状況を「世代間不均衡」として捉え、それが都市生活に与える倫理的含意について考察した。研究代表者の吉良は全体の統括のほか、報告書所収の論考「世代間不均衡下の都市倫理」にて、「シルバー民主主義」「老年支配（ジェロントクラシー）」などと批判的に言及される政治的状況について法哲学的に考察し、「世代間対立」に見える状況をいくつか取り上げ、問題の性質に応じた集合的主体性として世代を捉え直していくことを「都市」における価値観の多様性と関連付けながら論じた。吉良は他に関連する論考を3本公刊し、学会発表・一般向け講演会・哲学カフェなどを数回行った。

研究分担者の蝶名林は都市環境倫理学の議論の蓄積を丁寧にサーヴェイしたうえで、都市計画において「過去世代の意図」を尊重すべきかどうかという問題につき、Avenier de-Shalitら有力な論者の議論の分析を通じて多様な立場のあり方を明らかにした。

ほか、本報告書では4名の研究協力者が執筆した、世界の都市についての学術的コラムを掲載し、都市問題を立体的に考察することを目指した。4名の協力者は考古学、イスラーム思想史研究、近代中国文学、物理学と、それぞれ専門を異にし、研究のフィールドとした都市もまったく異なるが、それゆえに本課題への多角的アプローチが可能になった。

学会発表としては2016年10月29日（土）に、応用倫理学の国際学会 10th International Conference on Applied Ethics にてセッション”Urban Environmental Ethics”を組み、吉良と蝶名林、および協力者の高木智史の3人が英語で発表した（吉良・蝶名林の発表は本報告書掲載論考の内容）。本研究課題の国際発信に向けて重要な意義があったものと考えている。